

鈴木さんを送る

加藤 雅 啓 (植物園)

鈴木さんは31年の間植物園で植物の育成栽培にあたってこられた。鈴木さんの担当は主に日本庭園の維持管理である。日本庭園は園内の他の区域と比べてだいぶ趣がちがっている。植物園は研究植物園として、世界とくに東アジアの野生植物を教育研究のために収集、系統保存するのが重要な任務で、園内の相当部分はそれらの植物を元気よく、効率的に育てるために、つまり植物本位に管理されている。それに対して、日本庭園の区域はそのような性格をもつだけではなく、庭園として憩いの場でもある。例えば、そこに植えられているハギ類は研究に用いられている一方で、日本庭園を形づくる要素でもあり、のんびりとスケッチをする対象にもなっているのである。この多様性の確保と庭園の維持を両立させることは大変む

ずかしいことである。

鈴木さんは、池のまわりにマツ、ウメ、ハギ、ツツジの類などを調和を保ちながら配置、育成管理することによって、その両立をみごとにしとげられたのであった。ウメ林にかこまれた池にはハナショウブのいろいろな品種が系統保存され、入園者に愛されているのも両立の端的な例である。日本庭園は一部が徳川5代将軍綱吉の幼時の居邸であった白山御殿であるなど、江戸時代の代表的な庭園のひとつといわれ、鈴木さんのお仕事がいかに重大であったか、いまさらながら感心する次第である。鈴木さんが退職される4月以降も日本庭園を大切に管理して、鈴木さんにお小言をちょうだいしたり、がっかりさせたりすることがないようにしたい。

鈴木さんは永年の仕事柄か庭師の風格がある。地下足袋がとても似合っている。失われつつある個性をとりもどそうとするのが世の中の流れであるが、一芸に秀でた鈴木さんが去られることは植物園にとっても個性の喪失かもしれない。

自己主張の現代にあって、鈴木さんは珍しく控えめな方である。退職を控えたこの1年間、研修などいろいろ腕を磨いたり経験をつむ機会があったにもかかわらず、自分はもうすぐやめるからといって、後輩にその機会を譲られてしまうのであった。鈴木さんは素朴というか純粹というか飾り気のない方でもある。「初午」の屋外での宴会では

寒いものだから1升は入る大きなやかんに酒を入れて燗をする。そのやかんで酒をつぐのだが、一番びったりとしたつぎ手が鈴木さんであり、ついでもらった酒もおいしかった。

そういえば、2、3年前マツの剪定をしている最中、葉か小枝が眼に突きささり角膜かどこかが傷つく怪我をされたことがあり、何日も眼帯をして仕事を続けておられたが、あの怪我はもうすっかり治られたのだろうか。最後に変なことを思い出してしまったが、鈴木さん、長い間ありがとうございました。これからもどうぞお元気にお過ごし下さり、季節には植物園に足をお運び下さい。